开國說 農事部 二

特別
二1
2442
3

小野岡氏藏書

ニ1
2442
3

成形圖說卷之三

目錄

時節（トキヲリ）
附四季（ヨツノトキ）
占歲（コメウラ）
風蝗（カゼオホきむし）

昭和十八年購求

成形圖說卷之三

農事部 時節類

登伎袁利 書紀○即時節也 真字伊勢談

時節 左傳疏凡春秋分冬夏至立春立夏為啓立秋立冬為閉用此八節之日登觀臺書其所見雲物氣色○易革卦彖傳曰君子以治歷明時程子云推日月星辰之遷易明時之至明跡之至著莫四時之序也夫變易之道事之至大理之至明跡之至著莫知四時按曰月とい星辰とを並稱一時節とを云をの我いみしへ其明證なし堯典曰昊天歷象とらひ又日月星辰とらふ重仍曰仍とうつる天日のおいうつる歷象あらくと月星ハ日の光曜と受借て後に象と見ゆるなり而後人地上に在て其日月の交會を測ヲ中極の星位と觀て以て天行を知ふとなり大戴禮曾子云聖人慎守日月之數以察星辰之行以序四時之順逆謂之歷名義におひく解ざるなちり故に戴氏震書補傳に以歲月五辰為舜典之七政其說新に仍うといつくも又未發の建明なり○孔子云行夏之時と夏の時ハ今の節令とおなし殷周ハ冬

をいて歳首をせしゆ
急時令正うゝ次

蕃名テイト

孝德天皇詔曰天地陰陽不使四時相亂惟此生子萬物也
凡當農作之時宜早敎營田令畿内及四方國催課農桑夫
時節ハ專耕作乃上ニ係りてゝ古ゆ凡俗間ニ時
種時為付時刈上時収納時ゝ等を稱稽の時節といい
つゝ又節折折節折柄などを即時節也夫本集ニ裏乃く
ひ蔭ちゝ志ゝるゝや菊紅ゝるゝんとゝ志れるゝ時節
と志るゝようけていつゝ○物乃ゝどゝ紀時節と志る
といつゝハ御の指引より出て月乃出ゝ月入ゝ月稲乃刈
志ゝるゝなど也やゝいつゝ○又度を方言ニ典利と訓めゝ
二度三度のおゝし時の字どゝゝ毎ゝ毎ゝ
よりといつゝ古典と表ゝ毎ゝ書堯典敬授人時註謂

耕穫之候凡民事早晚之所關也管子ニ凡有地牧民者敎
在四時黃帝云四時之不正正五穀而已耳國語云三時敎
農而一時講武三時ハ春夏秋ゝて其一時は即冬ゝ民
の農隙ゝハ武術を講ゝ志也凡年中四時ゝ志ゝて
毎月二節都て廿四節ゝ有り然ゝ節序ニ遲速ゝ有ゝ此ハ
當年ゝの層ゝ真曆考曰上ゝ代の四時ハ曆乃節氣乃
刻ゝ同ゝ志ゝて其の始ハ不渭立春ゝ志ゝ立春
の次ニ二月の節乃次ゝ志ゝ其の始ゝ志ゝ夫ゝ三月
の節の次ゝ志ゝ其のゝ志ゝ四月乃節ゝ志ゝ其の
末ゝ志ゝ夏秋冬ゝ志ゝて初ゝ志ゝて如ゝ之ゝ

にして始まれバ末とはいひしかども某月といひて一
年を十二月と定むることハなかりき
扶桑畧記永承三年五月二日自太宰府進新羅暦与本朝旡相違但十二月大小不同同年十一月十六日自太宰府進大宋暦与本朝暦符合同五年十一月朔且賀條曰我朝異國其暦相違古今例多然而公家不必用異國之説 今按に 皇國
の時令直に年月の名に係て其授命るその春秋農事
を務め始を終に本末なるを謚足公の謂天地を書籍とし日月
を澄明とあふとは是をいふ類古事記傳に曰年ハ田寄也
タヨをつゞめてトとなるなりさてヨセ先登志とハ穀の事なる
とヨザミともいへる例古に多し
甚は神の御霊をて田に成て天皇に寄奉給ふゆゑにい
ふ田より出須といふ物にて穀を登志とハ云也
つまり世俗贈物の時向より又其器へ物を入て返れを年

実といふ大神宮年中行事の條にお米に小石を入て年
実と號けて授るよしあり年実ハ年穀の事をいひて其侭の
志にして古人の厚き遺習なるべし今ハ塩など盛て返を
なすも凶事の贈物にハ志るせず〇日次紀に曰正月也士農
工商各執贄互相賀名其祈年祭祝詞に皇神等能寄志奉
贄謂年玉亦此意なり
年奥津御年乎八束穂能嚴穂尓皇神等能寄志奉者云々
又大嘗會の時齋院を構て御年神大御食神を祭らるゝを
見るによりて奥津御年ハ稲をいふ稲ハ穀の中にても晩く
成ゆゑに奥といふなるよし稲の中にても晩をおくて
といふにて知るべしさて穀を一度取收を一年とは云なれ
ば年終の月新稲にて餅つくりて名て年餅と云始て
其餅を食ふを年取といふ又歳の稲を收て來果を迎ふ

るゆゑに豊津御年とおれ〳〵穀とんで年取とゝ称
ふなり又稲の始て生るゝを若年とゝ若年況よりと
やゝむるゝ歌よ源めり
春ハ草木の芽賞の意古歌よ木芽春雨とゝ見せ○月
令孟春是月也天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動王
命布農事
蕃名レンテ
夏ハ穂立なるりと省き夕是稲の成立よりもと一説よ
夜ハ切つきの暑あるを切む　後柏原天皇の大御歌夜冬とた
かゝつゆ時を天津日乃ちむさめるさ紙なめしまでみる

蕃名ソームル
秋ハ阿加利みてカリはキ是を稲の赤らむとゝ赤ひと
アカルと云る例多し　四季の夏秋を本此意みて稲よりを云名なり
一説よ秋ハ飽足の意俗よ秋よ暑さとゝ言あるを○荘
子正秋而萬實告成○月令季秋之月命冢宰農事備牧
蕃名ヘルフスト
冬ハ殖あを年穀成て恩頼のゝみたのゝを冬称好
忠歌よいとゝ寒あをかひなを紀年内へ急ぐ我身海の冬
とう信ないのゝわさを俗よ生のよき生乃行きゝい
ゝ恩頼の吉兆といつて一説よ冬ハひゆるの特せ

蕃名ウイントル

正月ハ生月也発生の始といふ生ムスと訓も息子とムスコ息女もムスメあど
いふがごとし俗字しむ月立るのまくわ異名佐美皮
や百番乃巻の明乃始あらんに百番歌合
利月 小緑の意先年くれてさみどりなる色 初霄月 霄ハ
ぬるバ所さへあし松いくまの貴之
移ふる年をゆく立春ハ春ハけえふし 霞初月 今日も粧山風
まつのたれ雪乃浦波 霞ハ月乃初日新のど 久
生名集かりや初春月 霞ハ月乃初日新のど
霞そめ月定家 初春月霞ハ月乃初日新のど
禮志月 初春月霞ハ月乃初日新のど
禮志月 初春月霞ハ月乃初日新のど
しは月名を眺らし 亦初見月初花月子日月 ちを云○鳥
く後にうらしふ
逐ム正月を太郎月といふ十二月を第月といふ○埋
木草紙ム太郎月より涵こちて三郎月まで云いらし

花ム清るぞん世おし

蕃名ヤニエアーリイ

二月ハ氣更来也生氣更ム発達ちといふきちきちきの
はじ新雲ハ
ぬ屋の多くさ家逢 異名宇米津佐月 彗の宿ハ
盛ちうめり 小卅生月 みどりなる若ム空淑し小卅生
ハ月ム 月ハ武蔵野の京紅昭
梅見月 風の情を神ムも 雪消月 年ハえて喜
冴せの祝の雪きえ 家
月乃涵ちふ梅津月 大寒のおどや ちるちん梅ハ
蕃名ヘブリユアーリイ 月いばくム咲ち風句ム出ろ

三月ハ弥生也是ム氣ム盛ちといふ 史ち雪や
ハ妻さく あべの市 異名佐波奈佐月 よひム盛
咲ムさく こ搗や後新 月 ハ雪と呼ぶ
やさけあち

月と素やかに
ひかる友則　華見月　春陽り空を一行の花見月ふつて櫻
ひかるなれぬ〳〵て後多羽天皇
月ふへて今盛〳〵〳〵〳〵樣月　春惜月　数ふ〳〵ぬるかさと
月陽りなる四方の山の端空赤　思ちそ月と空ぬ
空行涙の素と　華津月　ちれは月花より後の名乃行〳〵　夢
しる月家宿　染むふしく我ハ独濡ぬ袖し
見月　樣ちる初雪の山乃姿こ月
嵐の色ぬ　ゆきのなの色ぞ　○是月上巳ハ　顯宗御
宇ヨ始まる漢人と船と浮べて拾ふ云今日ぞ我せこ花
かつ〳〵せよ國史延曆十一年三月丁巳幸南園禊飲命群
臣賦詩今日潮干の事万葉に多く添ひ曜仙云一年之富
在春一春之富在于是月○ちう〳〵事次と時鳥と書ける
農時と知るの名なふ〳〵なる〳〵杜鵑ハ勸農の名ふ
て過時不熟〳〵鳥と云へ事古今集よいとむ〳〵ハ田とつ

れむらたく〳〵き涙志での田也と野ちく〳〵ふ志での
たをさは秋の田事の意なるへし添後新集ふ垣根のほ
鵑の早贄ふ〳〵者と志での田也よ志のびく涙つ枕
多我よ田歌と載てたく〳〵ふ己よ渠奴よ己ふまて
地我ハ田よたり格物論よ杜鵑三四月間夜鳴連且田家
俟其鳴興農事と云へ〳〵り又一名田歌鳥と云ふ宝町日
記よ卯月の初つ〳〵田歌多初聲〳〵をいとめつ〳〵
ふ見えて山ほふ人〳〵ハ枕そだた〳〵〳〵一聲と君ぶわ
ふ〳〵

番名ニアルト

四月ハ種月也稲種を植るとい一説ニ卯花月也万葉の序の頃雨の降ぢきて花を翫る意なり西土ニ云近梅雨也又梅雨をつゆといふハ梅の熟するをつゆとつえとと淡雪さよしつゝ神奈備の神の来ときた日よりも夏のさつきをよ弟異名古乃波登利月をとゝぎすのさつきの月き花の花交にかくれる奥山のほとゝぎすなん来ぬ得鳥羽月ほとゝぎすのなくこゑ○一本に花残月蕾なくて哀れ名残や山ふのこ義跡同羽乃月

皇卯花月反歌の卯の花月と何といはまじ夏初月子規鳴ては

門さ月青羽乃山乃垣のいはりに

蕃名アプリル

五月ハ幸月也幸ハ農事をいふ農事を佐とい佐と佐を出やりたの月稲苗と

分栽るなり小倉山さ月のけしのとゆゆ
ゐ月子苗を植て田子共法こゝ知家 異名佐久毛月 佐久
即農事をつゝしまるなり池きなるふまちとはゞ月の河州月
やめうり者をかざしけりさくら月として小野篁 田州月
五月雨に空もちくなるさけくも 礒男深月 如何して菱は
月四くさ月とハ見をいさゝ小笠とはして
行んきぶ国の空乃月不見月 さみ堂ふの時分とゝゝぬ
五月雨は頃宝象 空うりや月みをつきとゝ
ひ始め 橘月 諸代より橘月のぶもうしは月をゝ
けむ

を云○世の清ようをの笠しき我五月農夫といひ又五月
女ハ苗代を植ようとゝハ子田ふ〜たてゞ植ようおく
れゞと五月の農功を急ざあるゆゑ田の面のゐまて妹
が思妻とり所ゆ所ゆ知ゆ植ようとゝい在あゞうつげのを
ぐしを梳ゞ所うるる加茂神田植の祠にをとゝふの新

は泥にうゑよおれうるとゝうつり涙み農の業わゞ又
なふかゝさいふしかゝはみ孔引うゝ川まゝみの続よ
向ひてをんの邪頭ハみゞき泥ゞ紅粉香油をて髪面飽
まてぬか帰ゞ髪嬢よ夏ひやうなるゝと初好し後ハ舅
夫をいまゞをうりかかも新婦女の身逆るいうゞ
うり後の世乃くはしこ文ふんとゝゝを淡まし おとろ
ふるゞ和りまをの波ゝがの雪の沼るまつ召故
ハいくく詠ゝゝ子ゝ我ゝ様ゝ古ゝ わざの河ぢき
なくいでや雲鬼ゝ倶ゝんとをちこちの佛ようゝとくむま
で涌ひありく却て無ゝ為ゝ羅漢沢さゞの佛しゝゝやゞ

て地獄までも落めべき女ハ只男より縫織の業を勤め男
夫まめやかに己の口利ぎ所を辛苦きくして功速
法を渡らん使の舟とハ知るべし

蕃名メイ

六月ハ水月也稲田を引を引をつゝせ　ナは語の助　せゝ多田の
市やめちうひ乃みをたしてよ　異名伊須々久礼月　暮月　弥涼
たゝとのぶる多毎の神人事之
とお市子祝ふるゝ古ひて物るなりい物くれ月を
成ぬる空をて本近院大子○一説涼暮月風吹ハ池ハ波
なるいゝなる物くく　松蔭ハ家カをしつゝ
れ月の物ハをくもれ　風待月　ハたや風物つきの友乃う
ときよ　常夏月　ハ物時やゝでふる神の月　花の蜜と後鳥羽天皇　雨ふり
題昭　白雨ハ移時やゝでふる神の月　松風月　今日ハ
ゝ雨ハ移時やゝでふる神の月　松風月　今日ハ

りせ月のゆ
ぐれそ名れ

蕃名エーニイ

七月ハ穂見月也　此月稲穂出見をつゝ　概榜のたゝろを
ん稀ゝ物ふぐきふ　異名米泥安　此月きれぐゝのめで　いゝふはわぐら
つき立ゝバ負文　月ハ物ひ月まちくつ
いゝゝまたゝろのうれ　秋初月　風ふくは何をゝいちむ松
しかゝるゝて海外人ゝ　蔭乃秋のち月とゝるゝ
ゝ七夜月　こはしの今日やゝ　彩紅　棚機
ゝ月　月ふゝ萩乃立れ青のはぎれ　女郎月　乃裝
乃色にたくゝて名をゝ　文披月　織女の年ふ秋の雲
たゝとをみ物つし月題昭　紅ゝて書ふゝ
ぐゝる文ひ棚機月　かゝぎのよ乃秋乃搗ゝ
ろ乃月乃糸　よたゝはゝ自乃ゝろ物ゝゝり糸際
○是月を親月ゝを稱ふたゝは世に考祖の祭祀ゝ物
よゝゝゝり又生沖霊ゝゝふたゝを親長日記文明八年七

月十一日の所ゝ載られぬなき魂と称するあるより人の子孫と云年中行事盂蘭盆の類みて今日とてや内裏の司をそなへらん魂祭るてふ七月はじめ

蕃名ユーリイ

八月ハ葉月也稲葉の色と変るゆえ稲熟く穂ハ其葉あらはるゝ故乃原注うに雪れ皆に注雲又 異名佐波奈佐月さゝ花さ月菖蒲赤農事ハ終ていつきもぐわはせ秋風月萩の葉乃雲ふきこぶし者よりやの月夜弟藝 ま志ゝそ先しあきかぜの月定家見月名ふゝ頁バ秋のはゝ乃雲晴て雨つゝはし先ゝとある月よゝの月長明 木深月時乃立枝もお葉してさそめ乃月ゝ仲津月をくに花咲てゝ志ゝれけ沼ふゝれ名井号象仲津月迄くさ月ゝ月とハ今日河ゝの

○是月を田実といふ子里の歌澄ぐし按ゝ 後嵯峨天皇八月朔日に新穀を御て田実と宮ゝ志と著聞集に在り辯内侍日記宮治元年八月一日の歌に者ふハ又そゝゝゝきゝの名をかへてたのめだふき句とを

ある听雨齋集八月初吉詩序ゝ 本邦風俗名仲秋朔旦為憑日以資相贈昔は今日田実ゝて早稲米を打搗かはら事ゝ盛て親戚互ゝ取贈り文永記ゝ此七八年殊ゝ天下ゝ流布せりとゝて今京師浪華ハ憑と云又康富記に八朔乃事 後鳥羽帝乃雪ゝ出来歌

蕃名アウギユステユス

九月ハ夜長月也此月四方ヨリ同ル通宵ヒカリ也ク勤労ヨ就
の時なり　かゝみてを此月を長月といふ　なが月の名
なり　異名袁多加利月　さびし神うち拂ふの月　紅色
賞之　取月　常磐山いろゞ月　月ふる時ぬるゝ　菊花忠音
桔乃紅ざめ月秋ハ　紅葉月　よし野山青葉ぶ者の
つぬもよ　秋ハ　袁澄紅葉月　みぢ月　時雨ふりきて
ら色け　菊開月　おそ州ハ　ふる　枯ちて　紅ちて　亦是
ふる月　菊月　しを菊ハ　ハ花ちて　月
月梢秋　とも云　○古今集の三島の一ツなる稲負鳥といへ
るハ鶺鴒の事なり　二柱の大神ハ此鳥の首尾を動かす
なるいてこゝのまくらひはいでそめきるを絶のおれ
づゝふる生動乃事ヨ然るハ移游ぶ魚をとて思土

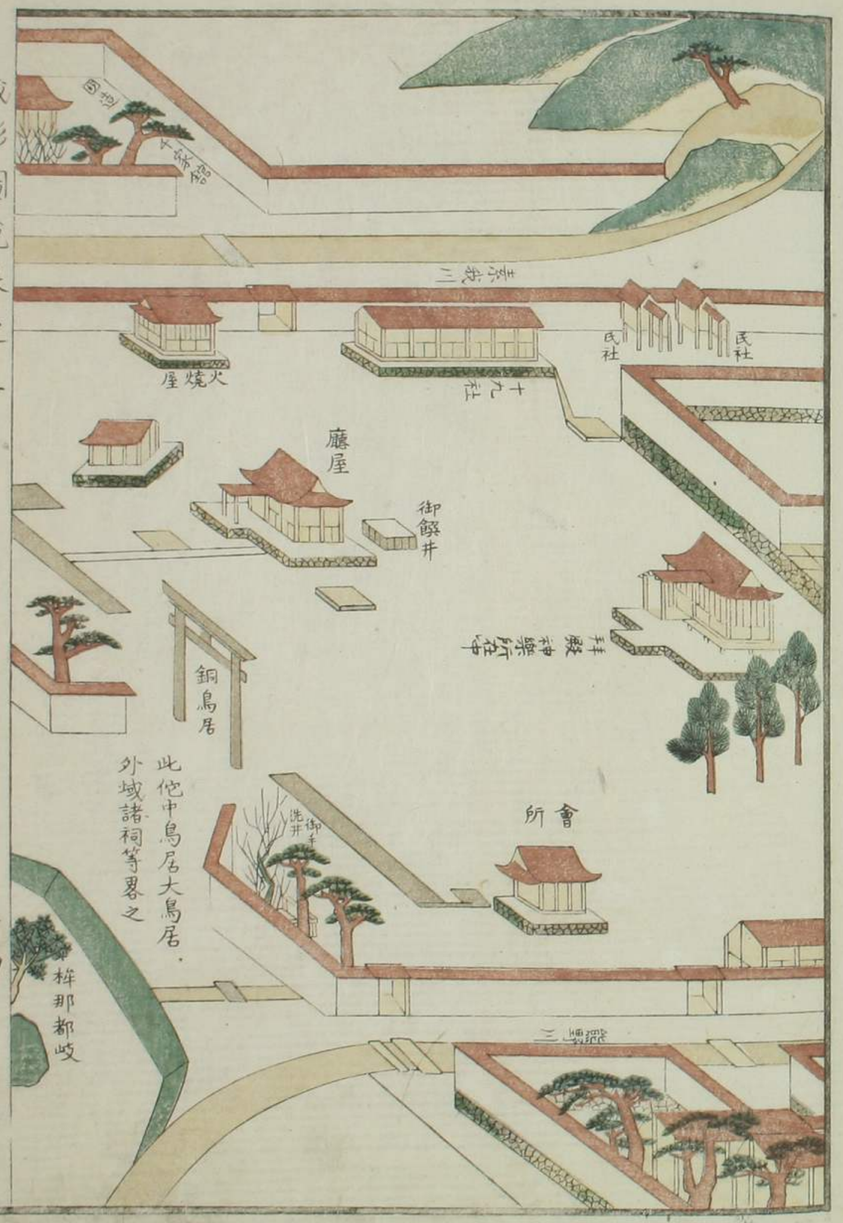
乃深つるを強ふるがごとくなるを山多の為る頃しをめ
秋田を刈をもしろ乃節をもがゆ魚ヨ稲課とり乃名
あり　弟盛集ヨ辛くていを紀刈つる山田ヨ稲おほ
と多のうしろめたに一汉ヨ新嘗雀乃ふ見をい
つ見又稲ハ否と田〳〵負ハ惟と通して歌よまんと思
惟ヨわゝうてかくやこふやと田ひ人て見を定めるい
の塚をしいつとや

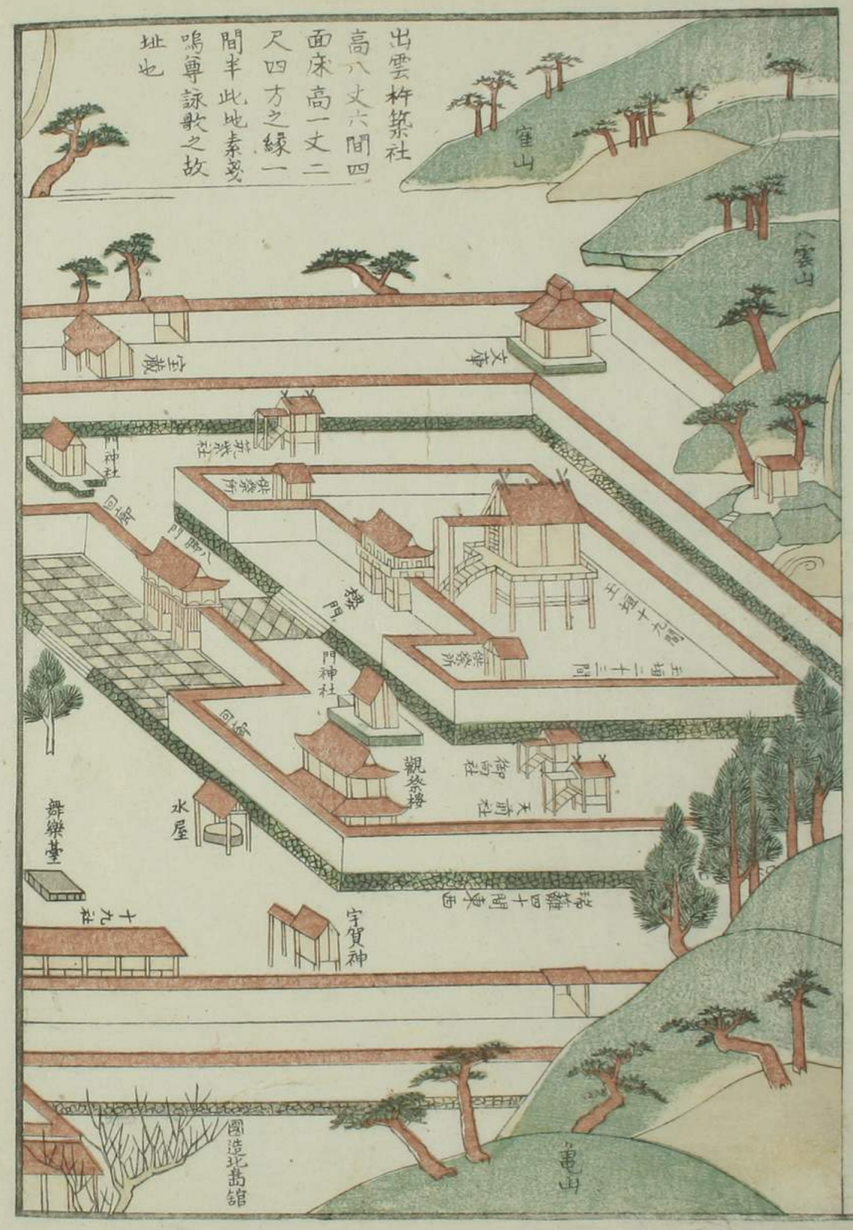
蕃名セプテムブル

十月ハ神嘗月也古ハ此月神嘗會を修ル事並ヨ神武紀
又類書纂要ヨ薦新民俗于十月炊新秔薦之于先塋後漢
書註正祭外十月嘗稲等謂之間祀曲禮孟冬之月天子乃

祈年于天宗今按ふるの文の祠祭是蓋いにしへ神嘗祭
るに新年の穀をとて奉るの遺也儀のなきをなげけり
神な月借が誅よりま　異名　加美奈加利月　是なる山はかくく
时る雨初りんを家　よとを山はかく冬にまち
里时雨ひさあき　初霜月　がちを来ろし野邊のやちくさ
神なくも月忠音　冬と来を初霜月の紅葉秋の色
長時雨月　散ちてく木乃葉の後れさがれ　拾月　是果める
時雨月　月名乃はじめに何を添まし　秋乃宮
少けきうちにうつり外神去月出雲なる松乃葉なりの宮
八縣るまやめし彩紹　神去月　名に八神さり月と何をい
はぬ　亦樹蔭月ともいふ亦小春と云○一説に十月を神無月
しといひ又雷無月といふ事れよしなきを出雲國まて
是月を神在月と唱ふるとの俗説に據るにや今按に出
雲杵築大社八天下の名神にて其本宮にハ客神五主乃
位を設ね又廣前乃左右に日國の諸神會ひまつる祠あ

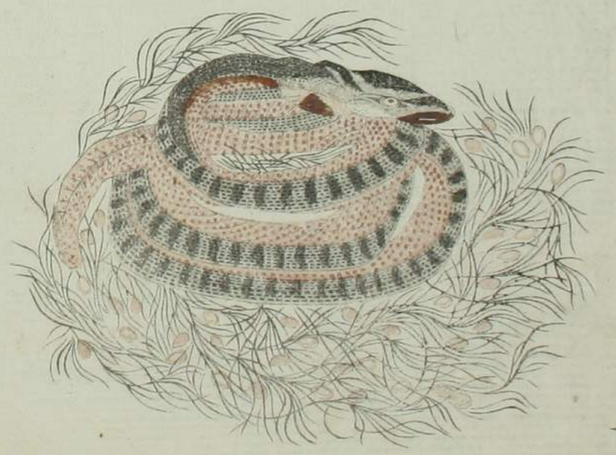
旦是十月に衆神祈禱の所なりいふは蓋いにしへ天
朝殊に天穗日命をもて祭主となし盛に大己貴命を寵
異ありしの遺風なるべし書紀竟宴得大己貴命矢田宿
祢公望乃歌に國むけし牙れさきより傳ふる靈る後の
よ世八あふぞられしき此恩頼八天が下被治平して有
生の為に病疴を療乃法を創られしよしなげくこのも
川冬乃祭事にもかけておもひはかりべし又十月八伊奘
冉尊神去ましし月にて出雲國に葬まつるより衆神宴に
會集ひさてかの祭礼にさ遍く神宴どもあるが中海上
より小蛇白浪に乗り濱辺に寄来る也十月十一日より


民社
民社
火焼屋
廳屋
御饌井
銅鳥居
此他中鳥居大鳥居
外域諸祠等畧之
會所
桙那都岐


出雲杵築社
高八丈六間四
面床高一丈二
尺四方之縁一
間半此地素戔
嗚尊詠歌之故
址也
窪山
雲山
神社
門神社
水屋
舞樂臺
宇賀神
園造記碑館
雲山

十五日迄の間ゝ其
大一尺許金あり色赤藻
し俗唱て龍蛇と称へ
俗年ト定の神人預潔祓
して地色にあてゝ搖ぎ
来を祈りゝ藻として神
ゝ藻ば龍蛇自来て生藻
の上に幡止ると六角の
箱ゝ納標縄と張て神前
ゝ供ゝ也此事故子載乃今ゝ到且絶て廃絶ふしとや

此蛇ハ乾枯せる者と写し



蕃名ヲクトヲブル

十一月ハ稲春月也此月稲を搗く穀を上り納せいみ一
へハ穀搗と春といつり一説ゝ霜降月の異名ありるまく
ぬるゝ霜月の意 異名志毛古利乃波月 ちをたるのゝ月の意
けるゝ霜月の意 雪見月 雪つる意ゝ月者乃
降月 風雪を霜ふり月也意ゝ霜ふり者乃 霜
宮居のかゝ乃ちゝ立柳葉 神来月 四方みゝ乃ゝ神
乃ちゝのゝ風けさ定乃 のかゝき月 天乃宮戸乃
とやゝ雪待月 山風と雪俗月といひふはし
くらん

蕃名ノヘムブル

十二月ハ稲終月也此月田稲の事終るゝ也 一説ゝ年縄月
やゝ八年の條

ありと云ふ也農事は終るといへども俊成の歌よ井
稲ちて山田も冬に成てこそをさまれる世乃様い乃ち
り〇汐とをくちそ久の京にあるうらの国もれ言ふる年
れ歳ぬ業平　異名登志與道　年月かさねてもまわりきぬ
三冬月　ゆぐこうまる時ぞとなくて云ふ也　春待月　芳て行
ようふ光ふれど書なれ月　雪の間けさ定る年い身
月のいそ於りき於長ぬ梅初月　花ハまだ蕾む枝々とは
色めく　親子月　吾いとの御竟とまりれやこ月れん
彩昭　のちの例なるべん〇　亦久礼古月の名なり
今取此志毛月志波須乃両月乃名ハ神楽歌に御稲春女
らぞ
乃ちもりき去はなりかれこちらちるよ地の河
ゆ〇古ハ春乃雪と成の絶たに泄先と和まるや故ゑ
親月れ名ハ曽丹集ゑ冬る年れ絶ゑ年ゑ今日ゑ

ゑ又ちなんちなんちなんちんちんの晩ゑ詠るな
し紙伊勢や　きくの里徒然艸ちはるのつたかりの秋ハあき人の
ゑる秋ちて竟参るわざハこの頃京ゑ行なる東の方
よハ行ちたちて行るちそわれなり

蕃名デセムブル

閏月ハ始仲哀紀ゑ見ゑ敏達紀ゑ潤月と行るも潤餘乃
義ゑれバせ　蜻蛉日記あ和二年の所ゑ歳毎ゑ行ちれハ
む清寧紀後月と川めりゑ年と行るも閏ゑ潤年
とんちゑ堯典以閏月定四時成歳〇穀梁傳云閏月者附
月之餘日也積分而成于月者也　史記秦宣公初志閏月　天の運行三

百六十日を立て月は大小あり六日と氣盈とし不足の六日と朔虛とを此過不及を合て十二日三年積て二十六日の餘りありとして三年に一閏を立る五歳は再閏十九年ふして七閏に及べば餘分なし是を一章といふ凡天周三百六十五度四分度の一を云ハ是一度數の事今日乃初昏より見れハ明日乃所よりハ少く西へ寄り支桜の間をハ一度を立て行又何天をいふ積ハ一日は一度づゝ西へ寄を三百六十五日の上又一日を四分に割る一行程よりある時初て見付る所より故る日夏至まで寄る日○いにしへハ月乃朔望稲の種穀を蒔て年月を記せり故は太古の暦数多し中の者ハ州末の業桜して春秋を識し海島ハ潮汐大小ありて朔望を察して蓑笠ざゝ事や○天周と磯礒の左旋は磯へ左旋の磯は蟻乃右行は追却るゝ如きと日月の右旋は磯へ故は日月常に天行は追却るゝ如きとい〻ハ明人のみ

ぜり言ぞ夫日月ふして豈蟻虫の如く見あらん哉蓋天周乃日行より早ハ却て天日の火氣盛なるは遅れて運轉の速なる事彼蒼くたる特和蘭ハ餘日を一月づゝに配ふ者日火の煙氣強きゝ

日て閏と寄ぞ又開國より已来伊子何百歳と暦代を紀し年號改元等の事なし○或曰閏月ある歳ハ時候を三十日後ふ為ちまを仕業ハ三十日長くなるてハ氣候の差河を且表日知れはぐき秋田湿かゝぐ氏ハ閏年ハ一候よりおゝ蒔植をべし又農家ハ本業の花菓を業謝を歓て荷植の節をを紀た古の恒をれぐを表ふゝ暖冬はば氣さくゝ六ゝ附ふをゝ寒さゝ秋風吹ぎれば歳業遅しを家の照像ふを開蕾の遅速行をば農事ハ稲をゆぐゝ

なく時は後まきのやうみんとともうす野菜は苗いそぎは後いそぎといふさと農家の第一の事なり

なをいふ上ハ田事と年月の名は係ていとしみて書そと特て耕作と為といふまたは真暦考に曰いへハ

そ地のおのをたとられるさよみて暦ハ来数みて一日一日とつぎくるを来

ゆく名をを民ハ接ぎまじくを時ハみづからよくさるさ

とみて去年まを記おを書類の花咲をんてハ苗代時

とさり化りおさ麦の穂のたくさんをんてハ田植る

時を去年みその稲の刈時をとて麦まく時をさるうご

さく年くまかくまてゆうばいうでき時くの事をう

ふるまハたくさんの○元田を植るの業を佐といふ苗を佐苗といふ植之女性佐竹女といふを姓を佐

開といふ其まを絶を佐登あといふ業を習ふ事

月を佐月といふ須の面を佐紀といふ性の魂を佐

魂といふ麥蒔ハ麥の熟を名を名くる時 按農圃の事をとべて佐と

いふ佐ハ真と通つる言まて農事は天道のまたとり

真田を佐奈太と刈るをおりつづし文章を佐久と刈め

るさといふ万葉まいでくるを蕎田あるくふと田の蕎を

称ていとくハ見えるる雄畧紀まハ真鋒田とおり

幸福の字を古ハさきをへさきをと刈めりきと訓と通

つりあまさきとるさくとをいりさいもをハ俗言をり

○夫田地ハ春耕を第一とす故是を春田とゝ春は陽氣
発散の時ゆゑ耕ふかゝ事て土壌をよく膏を解て地脉よ
く通ゝ潤ひ起易きゆゑ國語虢文公云農祥晨正日月底
于天廟註農祥房星也立春之日晨中於午農事之候也凡
春の耕を初起とゝ冬月ゟ春を候とて日或云初起
ハ仲春ゟ始し凡田土膏澤の氣は反ゝ冬ゟ土ゝ
つゝふゝのなを之を冬月ゟ反ては冰霜ゟ閉らまて生精
氣ゆゑ故ゟ又田土用ふハ土を動さめ若ゟ日用ゟ動
る土ハ功能ゟ田畦を二月中ゟ塗作ざしハ堅かゝ故
して多持あゝ土の性秋冬ハ重ゝ春夏ハ輕ゝ故三

日ゟハ土と炭と田ゝ重ゟ三日ゟてハ炭重して土輕
ゝ是を無炭とゝ史記ゟ見えゝ○秋分の時を
天日晝夜ひとしき時ゟ地氣も和暢ゟ土を反ゟ絶
ゝ是を秋田とゝ春秋の時に就て田を耕ハ地の
自然ゟ則ちゝて田民ハ人の倡論ゟ及ぶ五穀
ハおのゝて苗芽て四時の節序ゟ生成ゟ乃天日
の運行次第ゟ生成ゟ而春秋分の二時を時正
とゝハ此時天日赤道の天中を運行ゆゑ四節の
内ゟて寒暖ゟ合して農事成ゟ時ゟ唯
農事のゝれゝで春秋分の節ゟ晝夜ゟ作用て精

出須臾し爲事のたゝりて成功の速なる時ぞ冬夏の暑
寒るゝハおのゝ根より起るものゝ也 俗謂彼岸ハ春秋分
の後二日なり埃囊抄ニ曰彼岸畫夜齊等なる比ニ両岸左右均
等なる故ニ云到彼岸とハ佛書より出たる也お國ハ此称なきよ
し紙平石録ニ曰秋彼岸中ニ酒を造ル三七
日目ハ新酒成り僧ニ彼岸をもて宴の節ニ入て
造る酒ハ六十日を過ざれバ出来ずと寒暖の氣
人間の齢ニハおぼえず生育ニ未ハ無
や地より生育ニ未ハ無
この分なりと志ふべ
し偏ニ又冬至ハ天日赤道より遠く南
ニ偏ニ
ふること二十三度凡一度とハ地の一里三十
六町なりしてハ四十里許
ふる事を極信の至と須此時大小の麦を種畢ぬ
ふるの月と志るべし夏ニハ天日赤道より遠く北
ニ去ふること亦二十三度ニ極陽の至と此時

早晩稲を種早る始ニ絶たるの月を志るべしの二
時ハ中道の月ニハあらざれども物極まれば本ニ復
るゆゑ信の中ニ陽ハ生や芽ニ陽の中ニ信ハおの
つゝ実ふくらむ故ニ四月を耕し種播ること常ニ時ニ先
ぶべしおくれて仙遠て時ニ遅ざるやゝ遅く後て稔る
ものハ成実ゆゝ衆附ニ成ること多の月 皇國ハ天日の運行し
ますゝ大凡畿内ハ北極星地を出ること三十五度
東奥の極ハ四十度西南の邊ハ三十一度まで有て信陽
通正の土地ゆゑいづれの所ニ五穀なる生生ふ所
の上國なり漢書通典及宋史明史なぐ倭國ハ土宜

五穀とゝもに五禮通考云自中土而南寒漸平其冬或如春秋焉而一歲兩夏者有矣赤道之下自中土而北寒愈甚其夏或如春秋焉而春秋已同乎中土之冬矣赤道北四十餘度ゟ按ゟ清の北京北極出地四十二度強南京北極出地三十四度又北方の大強故ゟ南京のめき西地の中土とゝもゝべし

德墨多國ハ天毎日雨ふり西極の泥入多國ハ年中ゟ雨ふり堪輿廣大ゝして如ゝ此偏熱偏寒ゟの地世ゟハ數多あるゝとゝもゝ人ハ陰陽通正の樂國ゟ生ふゝ五穀稔らゞ衣服給ゝゞ常ゟ恨ゝ歌くハ田畋の習ゟて文育ふるハ是非あるゝとゝもゝ凡更ゝ此のハ上は天道生ゝの德ゝ人間受取て地ゟ播し培養

成形圖說卷之三

ゝて生化功と相ゝ此ハ物ゝて殘ざ此ゝなきのゝとゝもゝ間ゝ常ゟ農業と勤め樹藝と力ゝむゝ怠きこゝとなゝべし

或曰冥ゝ此ハ陽國ゟ西俗ハ峻山連なれる陰ゝの地ゟ多ゝ暖氣盛なゝ此ハ陽の働ゝ為ゝ此ゝ因て暖國ハ却て地中ゟ冷なる氣ゝ切出ゝ生ゝ冥ゝ此ハ平原の地ゟて地上冷なゝ也地下暖なゝ地上ゟ凍て仍と根切出蘂出生して仍と害ハ何ゝ也ゝ地上ゟ出ゝ仍ハ六十年ゟ一度許を何ゝ國一統の出ゝ但油虫とゝ此ゝ仍ハ毛と類ゝ何ゝ也ゝ此ゝ仍ハ暑ゝ盛なる夏ゝ此ゝ國ゟ用一ゝ此ゝ夷熱陰ゝ移ゝ深ゝ風立て西國のゝ此ゝ東偏寒の地或ハ夏ゟ雹ゝ降ゝ傷ゝ農ゝ冰雨ふゝて農ゝ傷ゝ

年夏河西縣大雨雹皆如拳大者或如斗殺畜生雉兎折樹木冰雨ハ冰ふゝ也ゝ此ゝ偏陰の寒天ゟ衝昇て即ふれゝ

あれば植物と成ずるその入るゝ物と溶てその色いでゝ成るとゝ云一説に水雨ハ山中の凝氷と夏月暴風よて吹揚るゝとも云ふ　氾勝之書云凡耕之本在于趨時和土敦糞澤早鋤穫春凍解地氣始通土一和解夏至天氣始暑陰氣始盛土復解夏至後九十日晝夜分天地氣和以此時耕田一而當五名曰膏澤皆得時功春地氣通可耕堅硬強地黒壚土輒平摩其塊以生草草生復耕之天有小雨復耕和之勿令有塊以待時所謂強土而弱之也春候地氣始通椓橛木長尺二寸埋尺見其二寸立春後土塊散上没橛陳根可拔此時二十日以後和氣去即土剛以此時耕一而當四和氣去耕四不當一杏始華榮輒耕望杏花落復耕耕輒蘸之土甚輕者以牛羊踐之如此則土強此謂弱土而強之也春氣未通則土歴適不保澤終歳不宜稼非糞不解慎無早耕須草生至可種時有雨即種土相親苗獨生草穢爛皆成良田此一耕而當五也不如此而早耕塊硬苗穢同孔出不可鋤治及為敗田秋無雨而耕絶土氣土堅塔名曰脂田及盛冬耕泄陰氣土枯燥名曰脯田脯田與脂田皆傷田二歳不起稼則一歳休之凡愛田常以五月耕六月再耕七月勿耕謹摩平以待種時五月耕一當三六月耕一當再若七月耕五不當一冬雨雪止輒以蘸之掩地雪勿使從風飄去後雪復蘸之則立春保澤凍虫死來年宜稼得時之和適地之宜田

雖薄惡収可畝十石○夏より秋の雨より東南の方より
光物ゆることなり是を稲妻稲光稲交ぶと呼つり俗
より稲光多き年は稲よく稔るあり故に稲の夫を妻
とをいふ俗に和名鈔並に稲の名に係ることバ雷来る
由を久しきことなり古今六帖に稲妻はかけらふ斗
の事なり秋乃田の実は人を待事なり又雷は怒祇み
て又日水鳴ることを云火神日奇祇の業なりと書紀にはえ
ざる日火の激なり雷の始て鳴発の時日氣地中より徹
る事を農耕を作ることきの時なり易解卦雷雨作而
百果草木皆甲拆章應物ゞ詩に微雨衆卉新一雷驚蟄始

田家幾日閑耕種從此起按に天日の火氣地下の薄雲
塞を為に水雲と突破ることなり火氣鬱
動せり火と水に投し或は水氣に火と付て激
あるを云ふべし又大に塩辛を懸し鳥統を懸やはは下
界の梵氣と敵して雷を生じ之に由て奔逆を高き所に
雷士益救の巔に登て雷を守ば履下ることなり故に
雷は必地中より起るの況ある五雑組云雷之形人常有
見之者大約似雌雞肉翅其響乃両翅奮撲作聲也宋儒以
陰陽之理解釋雷電此誠可笑雷の雞に似ることを云ふ續
紀の中に五雞組より早くいふ事なり物部茂
卿に或者雷の金鮓を問しに吾弱年より病氣の疾
ありて腹中度々鳴ることなきに如何の故なるや
と考れども六年六十二まで終に我身の中な
ぐるいつなる如くなりて答やいふ義を計ひ
しに地の神妙像功の不測は吾答決して知りがたし
笑ひしとやは是は五雑組に曰ま先日火
の氣といふまて大鳴の下に生る者は恐怖なること理
なり雷鳴は小児に瞬と隠せと云ふ
とあり或曰是は俯ぶして心氣を丹田に藏よりの方語

あり凡雷震る時は壁を裂磐摧て卧さ
ゐ木は悉なしあるは人を立ながらて傷はまたは屋を仆まて脚を折て
傷るのみある秋の氣候はなれば天日澄く南方に雷
鳴を稍静まて激奇なく唯火光のみ見たるのみ其来は
霹靂の日香天の九月に添めふるを也一況は熱閃は山中
の巖石より起発ゆえいつりこの時分は稻穂を方に登
熟をなして生尤物は託て名市にそ見も古人の時と命
てる年穀のゆかすていひ来と想ふ蓋し代巨記
は越後国はいかをよのつるのおとに神の降るり特は
雷の始て降むとてはおびたゝしく峰ねめくゝ激の
濁流のかはをなしされバいかんして雷はなるそ降

き電光をいひ伝ふるのといふこゝは人間の知るおとふ
ひのゝ雷ふをふましおとはいふ海ゞなやまも疑ひは
ゝをしりしるとなの川の流は入て海は溢を日出て月
へるを止ふ変をもゝぶ伏ぐめく天地の神妙わざをい
りでうゝの知るをさゝで其迹をもりかくはいへるのを

米占書紀通證古語拾遺占求をして始ゝ後教奇はけ
ひるを武頭昭曰ちゝひは掃除也家の八箒のおとくうゝは多の民をゝ初を知
よ人ゆ民間除夜竈を掃ひ以来年の吉凶を占ふ此竈輪
ゐ色

夕占萬葉集又夕卿問砥
占ふぐ尺えゝり

夕食拾芥鈔夕食を向頭ふ
けゝさや夕方の神ふ

と聞ば道行人よ占正させよ児女子の言に黄楊の櫛を持女三人三街に向ひ聞こととゝ云歌を三度誦へ堺を作し米を散し櫛歯を鳴すこと三度堺の内に来る人の答によりて吉凶をうらなふなりといへり未来占に近し業葉に夜占問ふに宮神に要く白露とふどつくも是なり

占歳 世本ニ云后益作占歳ヲ呂氏春秋亦云ル尓師曠占フ五穀貴賤ヲ事物紀原ニ占歳ハ十月朔日風従東来ハ春賤逆フ此ニ者ハ貴シ

卜稼 禮記社之日位卜ニ来歳之稼ヲ 米卜 番禺雑編

蕃名ホールセクギンクハン.レイケ.ヨフ.シカアルセ.ヨヲグスト

田家ハ毎年正月望に米占管試てふ占ひをとて今歳又ハ来年の農稼を決る事にて其占の違はぬを京斎といふべし西国の田家にてハ正月十五日を望年と称て歳囙よりも大切に祝ひ賀て親子兄弟一所に會集嫁せし婦まで歎省がてらに来て門戸を杜ぎ他客を辞て物忌し田神を祭り稲粟菽麦を始として一切の種子を大釜に入て粥とし節をはなしたる竹筒若干を作り其筒毎に衆穀の目識を或ハ刻ミ或ハ書し粥の中に投之を煮たる数沸して後に竹筒を取上見るに筒の内に各衆穀の入たると一盃に填実たるを見たりげると或ハ其の稲満ハ其の稲の有年なり其粟の満ハ其の粟の有年と定め又中なるハ中年なり半ハ荒年と定め庶穀皆充実ハ五穀の豊稔と定めて家戸々各占を祝ひ酒食を作りて秋

戒と祝禱あり 俗諺志曰河内國枚岡の神社より田祭と云ハ御粥祭より大なる釜をもちゐ小豆粥を
煮て祠具とし五穀の禱孫りて竹と立寸だりに伐て
五十四束を五十四束を五穀及色〻の種物の
中へ投一〻を煮てとりて粥煮
の加減をみて何分種ハ十分
の羽振苑の地とも云ふ正月初申より亥日まで居竜
の象あり戒より農民等一切の農具等を五穀
の種子と混雜して一器に盛り西堂書日仍行番より横へ行
て神人の於ると神人混雜の穀子を一掬づゝ土民
より授ける土民給米を受取て中の多き者を
撰て當年の蒔初日とす

次紀に記るゝ
日見亦戚占也 神名秘書に風神の祭に栢流とゝふ所の
其栢者を八浮い流を占年ハ流と沒る四月七月所ふ占
とゝ見えるる續古今集思ふ所まで三角栢り同ふ
の沈に浮ハ涙なり詩小雅大人占之衆維魚矣實維
豐年註埤雅俗云春魚遺子如粟埋泥中明年水及故岸則
皆化而為魚如遇旱乾水不及故岸則其子為日暴乃
成飛蝗故說者以為陰陽和
則魚多豐年夢魚理或然也 戒菴漫筆に東入吳門十萬家
家〻爆穀ト年華就鍋抛下黃金粟轉手翻成白玉花紅粉
佳人占喜事白頭老叟問生涯曉來粧飾諸兒女數片梅花
插鬢斜この年華トいハ上元の夜よなゝ沒ゝ歲時記
に見えるる齊民要術年の豐凶を占ふと多〻の清人

八正月七日より十日まで天氣和清なれば年歳豊熟なるよし云四季物語ゑ漢語鈔を引て大さしの夜ハとゝぎすつむとて高き屋のぐせて蓑笠ぬらさぬゑ着みしてゆのうゝの運みるるゝや堀川百首ハとぶ法のおぼけうあきよとうこゝと梢みがゝるゑ年と銭弐極月晦日登岡自我両足間觀居地之氣知明年吉凶是云岡見又吉凶の氣とゝぶ法ゝ云續貫行曰正月元旦雨風あく晩の雪風のぐとゆわるゑ雷霧法日うちあげきて岡あるハ水年がゝのよろしき瑞ゝ按朴樹の新葉ゑ遠速ありて茅の遅く出る方より大

風ゑ法ゝゝゑ百姓農曰自然の運定法理ゑ違ゝる人ゝ考へあゝバゑ法ゝゑ志れどもゝ北冥蘭呂朱風雨陰晴風き年ハ絶てゑさの理ゑ正六十一度ゑ八卦屠ゑ復ゝゝふゝ年の干支ゝて四季ゑ朱ゑ節氣まで合遊ゝゝゝゑハゝゝゝゝ凡天氣ハ諸ゑ南北風一ゝゝゝゝゝ天地ゑ生て山氣の天氣ハ老農ゑ岩ゝゑ浦須のゝ宗ハ漁夫船長ゑ弱めゝし尤俗諺理ゑゝゝ作ゝゝゝゝ又ゆて出ゝゝゝゝゝゝゝ須常ゑんゝゝゝゝて試むゝゝゝゝゝ凡天氣と考て地毎ゑ戒ゝれハゝ功ゝ蓋ゑハゝゑゝゝゝゝゝ第ての用ん法要

とおちつくハ惰懶人の道を辞なり

風蝗　風ハ日薄く冊に加是の反氣也又乾生の義也といへ
ども蓋天日の氣大地の水薄燒せば側風となり亦雨
の風先至ればハ物を潤沃の氣なれバ日氣なれバ也其風止ば則雨と
なる故風ハ火気の薄より起りて水氣從て昇るなり春の風ハ下より昇り夏の風ハ空中
より横行するなり又風一時ハ必ずしもの日なるの年大抵秋の颶風を南
氣ハ動き易し和し昇の速なるの海國ハ風急しといへ
海の島地などハ急て強し東北の海國ハ風急しといへ
ども甚しきハ稀なり是日の南よりめぐりひ行ふ從ひ
て日氣の海水を撲激の氣なりとなる莊子が
風ハ大塊の噫氣といへるも理ふ近ふ侫べし

蕃名ハルトワアイ　風　シカーデレイキウインイント　損田の風

コールン・ベイトトル　蝗

五穀の中ふてを稲の成るなるべ侫ふとハ是ふ風ふの
二ツ小在侫ふとなり夏ふ夏ふ秋ふ移る須東風多ふれバ稲
穂落て從皇賊あふ田をはくくと蔵去ふり而ふ南風
連ふ吹ハ万須の田盡出ばき潦ふ時の冒ふ霜降の葉
原ふ食つぶせ是ふ東風ハ温潤の生氣有りて南風ハ甚熱
の芽淳なるふよ侫べし又西南の地ハ之ふ反て西風と
喜ふ東風と怕を侫地形ふ土の志わざふり歌ふ五月
西雲ハみふふ秋ハ北い侫と東風ふ雨降ふ雨降ふ統
ふ風ふ方角ふ因て侫ふ侫ふ須東國ハ雨ふふんと
して八雲ふく西風ハ雨と從て八雲と曇ふれ是且雲

雨ハ必山より添ふ事あり山の方より風おもばかるゝ
ゞ百と常ぶなる事○蝗蟲の稲田を害ずる既に神代紀に
昆蟲の災と記されしと始て古語拾遺に其驅除
に以麻柄作勅以其葉掃之以天押草押之押草ハ蓋又鳥
羽扇之以牛宍置溝口作男莖形以加之以薏子蜀椒呉桃
葉及塩班置其畔ことを今東北の邊土に男莖の形と蹄像
驅除しの遺習みして俗に弓削の道鏡又三代實録貞觀
と祀るといふハみゞろ虫なるべし
十六年八月伊勢國言蝗蟲食稲其虫頭赤して丹のごと
く背青く腹黒班みして大きさのハ一寸五分小きさの
ハ一寸一日食ふこと凡四五町ばかり其過る所ハ遺穂ふ

丹頂の稲虫ハ爾雅釋虫の蠶蟲なるべし

勢　大神宮に遣し幣と奉る蝗災と禳ふことを禱る自後
蝗虫或蝶に化し或小蜂の為に蟹殺されて一時に盡く
滅ぶることもあり　ハ禁厭の術して蝗と解し今も毛れ
めしなる本藩の俗田に蝗つきぬる時ハ必霧島廟に禱
祝て虫拂と称ふ十に七八年災を免るゝことなる蓋　皇
孫尊始高千穂峯に降臨の時散米とまして雲霧の害を
拂ひしし故実に倣ふ事歟　義氏曰蕓虫ハ苗立て立て稠く
種とおろし苗痩て生立ぬ虫生ず稀く蒔て大き
苗ハ必虫つきぬる事昇老地治えの業まなれゆゑ

成形圖說卷之三　二十九

虫稲虫ハ田を深水にして株に付くると云又ハ多
くほして深くなる又蜘蛛の糸の出穂と言ふ田ハ十月中田
の畦に藁を焼き焼草に乳附を入れ蜘の子と拂
よる虫年蜘の網を張の患なし一年相州足柄郡に蜉
蝣のめさ羽虫稲に付押並て穂を出しうる次第くに成
さびたる虫何とも尽さやうなく強ざるへ虫を時おも
ふ様鎮守八田の神稲竜おはしませ然て村長を
出し虫除の祈を願したむしのくさふ五文字と白の
上に立て多くの人のめしうしの神の志をみたの虫の
等を乞うるしうぶなきさを歌を読に書て竹に挿て田

毎に植に入て明松を立田の中へ植て竹の
に虫稲と云て縦横に行西より東より川原に集り明松を
挑て焼くぐし耕作の地の石ばくハ蓑のごとく火を焼
てあるぐしを絶しを白みなり初秋の穂を取除みして
ちくかしこに虫を出て面く田毎にひしの記りうの私
とふり立く稲と云て田の中に十文字に西より吉いや等
と上て川原に走れり明松を一所に挑て孔雀して田
虫田場に八形くに蓑火と揚うの打句を唱田神を祈
虫ちの火の光を追て出わまく乾来蓑火の本に蔵て稲
出来く成ら虫に打民雨降秋風冷やうに成ぬ虫ハ出来

く失てバ見さ行まバ虫送ハ所々に篝火を揚明松を立
て執く田の中を追出るに若くハなしと云り按に詩
大田云去螟螣及其蟊賊無害我田穉田祖有神秉畀炎火
註蟲蝗則非人力所及也故願田祖之神持此四蟲付之炎
火之中也姚崇遣使捕蝗引此為證夜中設火火邊掘坑且
焚且瘞蓋古之遺法如此是和漢同日の談といふべし甚
氏を之は取りしまや今或鐘鼓して田畔を躍り虫
を拂ひ送ると云ものと日次紀事に見えたり或ハ芸薹諸種
の油鯨の脂等を澆き之を除さるの法多し○今清人
蝗蛹を驅除するは其所の里長施伐の時先北方へ向て拜

祭祈禱の法あり頭毫をもて長二尺餘の龍の像を紙へ
殘にて全躰を作り凋へ五寸ほどの線香四束の中二束ハ
頭より腹まで焚し二束ハ尾より腹の中まで焚し丸木
二本をもて龍を繫ぎやうにし又白虎の二字を木牌に
書て逆に田の四方に樹つ四方の畔道より金鼓銅鑼を
撃ならす声と一時なれバ其眉に線香をやしきまゞ烓
継ありかくしつゝ他の田に移行て一時づゝ亦かくの
ごとくするよし是西省巡捕司顔家選ふかの甲申の
歳沖縄島に使として来りて待按せし所なりといふ 近来清の王文
槐が銭穀備要に捕蝗の説極て詳なり蝗條に記せり按に越語稲蟹注食稲蟹といへる

日平江記事云呉中鱸尼如蝗平田皆満稲穀蕩盡又天工開物云陝洛之間憂蟲蝕者或以砒霜拌麦種と此等みて
を漢国風土の醜薄を知べし○或人のいひしく風ハ
天地をとき清るの大徳なるものみして世間を美木を
拔き漂はしわどの風なる時ハ非常俊傑を出ぬ陽陰
を分別なれうき世ハ尋常の凡俗のみ多かるといへ
ど治亂の氣運ハ去ばらくおく置し器ざとみると熱風
荒水てふものゝ有ばぎあばゞ穀の実人間の種をざ
かいり汁ゝ絶るべき是ゝ多りてハ天災の技を不人力
のいゝんとをなしぐきわざみ有ばバ　天武天皇

を勅して祠風神千龍田立野又祭大忌神於廣瀬河曲ゐ
ふことを成くゐさるされ祝詞ゐハ天下乃公民乃作物乎
惡風荒水尓遇都々不成傷波かど乃え〻ゐ（令義解曰風神祭欲令洽）
風不吹稼穡滋登大忌祭令山谷水變成　嵯峨天皇弘仁
甘水浸潤苗稼得其全稔故有此祭也
元年敕曰夏苗已成秋稼始熟恐風雨失時嘉穀被害宜遣
使畿内奉幣名神よし後紀ゐ載ゐ〻り○俊頼雜談鈔ゐ
信濃国風神と乎ふ風祝部の名ゐ見信濃なる本曾路
の楯岩ゐ乃風の祝ゐ乎ゐ〻ゐ風信濃ゐハ地形
高く極て風強きなり是ゐ同く風間神社風間村等の
名乃ゐ〻ゐ袋冊ゐ諏方の神の社ゐ風の祝とゐ

のを為て涼く蔭居状ひを百日の間堂塔ゐ
乃さゐれバ風靜ゐて農業乃為ゐ日出ゐ〻ゐ少のすき間
を乎て日乃光を見せゐるまバ風治ゐ〻ゐ乎ゐ田き俗事と
ハ乃ゐ〻ゐを伝ゐ聞ゐて風の暴ハ作物の害ゐ乃れバ
結風乃祭を行ふゐて此新治〻枝葉を〻ゐ成蓋　先王
敬畏の心を存して民を視ること傷ゐ〻ゐ乎惻怛の
情ゐ上下ゐ禱爾し幽冥の神功ゐ頼ゐ天地和順五穀豊
衍豈啻頭露の政道ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ
ゐ〻　一條天皇ハ冬の夜ゐ御衣を脱ておもゐ〻ゐ
と上東門院のまゐ〻かくハせ給ふ〻同ゐ〻ゐれバ

日本國の民さむさに我ひとりあるべきやうなる歟
ら歟と仰らるゝ事を後京極摂政よみ給ふれた
はしまを神代の中よりさむき民のみの歟
なく
今上皇帝の大御歌なつ冬かきあるを歟実みおりてよ
蓬かりんこのひとはいうるくいづまを衣食のふるも
人よ切なれバかくはあるれとなるを歟
あるを歟ふるべし國老談苑云宋太宗嘗冬月命撤獸
炭左右或啟曰今日苦寒上曰天下民困是寒者衆矣朕何
獨温愉哉と異域同日の談とぶ歟

臣國柱謹按ずるに世の仁君仁人政と

為の道例を他嫌之を分て及して之を庶民に求む昔吾
宰相侯征韓の役泗川新寨の孤城に嬰る守者一万人朝
鮮国より寒地夜或ハ臣庶と雜居て火を擁して寒を禦嘗
て憂樂と共にせざるバなく時に加義情の卒位あ
るおりにらく薩軍ハ頗る主侯の礼あきに似りと雖ども
ゆて怨ずらして卒位の不知を戒て曰上下貳ぶなく回
望を是夫臣分と合もるもの歟せ上ほりきれバ
明将董一元十万兵として新寨を攻圍ふく数重実に慶
長三年十月朔日吾侯殺出して大に明兵と撃破し一勢
ふして斬獲四万級を得る遂に天兵般師の行を啟き
永く　日国の威稜を失ひ抑も本国ハ一統恩義
兼行るの政に拘ふ而や楠中将曰合戦の勝敗ハ士卒志と一致ると
のみ抑治乱盛衰ハ人心ハ古今変ふ
るとなく故に事ハ理ハ古今変ふ
に因て附記と云　此ハ

或老農のいへるハ耕作ハ僅ハ子を育つるがごとく今
ハ乳がおしう新産をハなつうるがごとくハ家を保

しと雖ども雖ども葉忘れがんとなりてハ費とく
も渇くんとなりてハ為と淡き根芽をせうまんと念きて
ハ茅を抜き兩風を捷し法てハ之と培ひ之と枝出つう
ば穀倉倶添て取飽し晨夕を拯育るとき紀ハ土地の肥磽
みを拘ず苗稼の不熟ハなるふ〻しくつ見種樹家
の常譚ゝいつゝと安の怠情作人田地の費ハ疎みして
勤ともれバ商ゝ日ゝ市常産の利とりて活んと貪る
ものゝ較ぶまバ殊みして農圃の三昧と得るふゝい
ふ〻し或日熱風ふく吹て田を畑を穂波を折て作り物
悉く荒ゝくんとなりゝゝ作り物ハおのゝのお風あ

ゝゝめるの事よく作り物ハ荒とゝゝて吹ゝ
かゝる時ハ家の内外ゝゝ出て外樹ゝ風の中ゝ
ゝて手ゝ持ゝ色バ田ゝ日強てハ風のゝゝ出て樹
倒ゝいつゝゝれバ大風洪ゝの後ハ畑ゝの根ゝ露ひ
稲ハ偃ゝる穂の実腐ゝぬやゝに其時ゝ除て助ゝ無ゝ
べゝゝ穂ゝも寒東ゝハ大風吹て倒ゝとゝゝゝゝハ
つゝ稼ゝゝゝゝ〇しゝゝ民ゝ使ひ工ゝ興ゝゝハ
農の時ゝ違ゝ耕の業ゝ共ゝ緊要の業減ゝ
仁徳紀曰不可以私事之故止耕穡之時也持統紀六年三
月將以幸伊勢中納言三輪朝臣高市麿敢直諫爭妨於

農時不聴於是高市麿脱其冠位擎上於朝重諫曰農作之
節車駕未可以動矣天皇遂不従諫同年五月詔筑紫太宰
率河内王等曰宜遣沙門大隅與阿多而傳佛教矣（阿多ハ今の薩摩国）
按是本藩佛法流布の始なるべし嗟乎帝女上にまし
て已に高市麿農時を妨ぐべからざるの直諫を聴納ま
しませ又胡教を崇敷し禍端を百世に開きぞ何代の女上
も佛に淫し民を傷ざるはあらざらん乱然として同七年
詔令天下勧殖桑紵梨栗蕪菁等草木以助五穀又大赦天
下鰥寡孤獨篤癃貧不能自存者賜稲蠲服調役ましますと
あり此帝もかくれして紕過を恢復善政を修まふことの

あり史記に粛侯游大陵出於鹿門大戊午扣馬曰耕事方
急一日不作百日不食侯下車と粛侯馬を扣ふるの諫を
嘉納ありて周発に是なる更し中務家集に神ひちて極し
まふるとは人ら田を護りは知りて猶あきらしん是鷹狩
鹿狩をとさるかの時節を考へども農稼の害をあへべから
ざるよし戒示してよめるなり漢武帝嘗入南山
下射獵馳騖禾稼之地民皆号呼罵詈といへるに似たる什
なりき

小野岡氏藏書

成形圖說卷之三終